

1987年から1993年の大学研究紀要を中心として

文教大女短大 大久保洋子

目的 現在の我が国には国外からの数多くの食品や料理文化が導入され、めまぐるしく変化している。それらに対する記録・調査などがどのようになされているかをみるにはいろいろな手段が考えられる。そのうちのひとつとして本学会のデータベースも44年間110000件(1997年から)という膨大なデータベースが学術情報センターを経由して検索することが出来るようになった。それらの中から「食生活」分野の傾向を見ることを目的に分析検討をおこなった。

方法 日本家政学会データベースにおいて検索コードNo157「食生活」を用いた。今回は多くの記載学会誌、雑誌などは除外し、紀要論文に限って1987年～1993年について、シソーラス項目に準じて若干の修正を加え、食事・食文化・献立・食生活調査・食生活情報・食器具・外国・その他の8項目に分類し考察した。

結果 食生活コードNo157のうち紀要論文を検索すると1994年～1986年までの間にはたった1件であった。1987年～1993年ではそれぞれ82、84、80、89、83、99、95件であった。つぎに1944年～1986年について食生活を加えて検索すると1960年までは0件、1961年～1986年まで0から31件であった。これは報文タイトルに「食生活」の語彙を含まないものは検索されない数値である。本報告での1987年～1993年での検索は「食生活」の内容と判断したものが登録されているので、1987年からの傾向をみるために、研究内容を8項目に分類した結果、食生活調査・食文化は各年ともに研究対象としての頻度が高かった。